慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	プラトン『テアイテトス』の脱線部における知と生の問題
Sub Title	The problem of knowledge and way of life in the digression of Plato's Theaetetus
Author	郷家, 祐海(Goke, Yukai)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2018
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.141 (2018. 3) ,p.53- 76
JaLC DOI	
Abstract	In the digression of Theaetetus which lies in the middle part of this dialogue, Plato compares the way of orator's life and the philosopher's life. He characterizes the latter as homoiôsis theôi kata to dunaton, 'becoming like god so far as is possible.' Although ancient Platonists have accepted this Platonic thought as the goal of life, 20th century scholars have cared little about it. The reason for this is that the digression seems to have nothing to do with the subject of this dialogue "what is Knowledge (epistêmê)?" While some interpretations focus on the digression recently, most of these interpretations concentrate on finding Forms, which mostly appear in Plato's middle period dialogues, in the digression. The significance of the digression in view of the relation with arguments about knowledge in this dialogue has been hardly mentioned. In this paper, I will first consider the argument in the digression, and then discuss the role of the digression in this dialogue. I will also argue that it is shown in the digression that philosophers' inquiry on the nature of being, especially of human-beings, and the understanding of the nature of human-beings (anthroupou physis) are needed to grasp true wisdom (sophia) and virtue (aretê) of human-beings, which is characterized as the recognition of human ignorance. Additionally, the digression indicates the project of the whole argument in this dialogue, which aims to get readers to pay attention to human-being as a knowing-subject through the question about knowledge.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000141-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プラトン『テアイテトス』の脱線部における知と生の問題

郷　家　祐　海*

The Problem of Knowledge and Way of Life in the Digression of Plato's *Theaetetus*

Yukai Goke

In the digression of *Theaetetus* which lies in the middle part of this dialogue, Plato compares the way of orator's life and the philosopher's life. He characterizes the latter as *homoiôsis theôi kata to dunaton*, 'becoming like god so far as is possible.' Although ancient Platonists have accepted this Platonic thought as the goal of life, 20th-century scholars have cared little about it. The reason for this is that the digression seems to have nothing to do with the subject of this dialogue "what is Knowledge (*epistêmê*)?"

While some interpretations focus on the digression recently, most of these interpretations concentrate on finding Forms, which mostly appear in Plato's middle period dialogues, in the digression. The significance of the digression in view of the relation with arguments about knowledge in this dialogue has been hardly mentioned.

In this paper, I will first consider the argument in the digression, and then discuss the role of the digression in this dialogue. I will also argue that it is shown in the digression that philosophers' inquiry on the nature of being, especially of human-beings, and the understanding of the nature of human-beings (*anthroupou physis*) are needed to grasp true wisdom (*sophia*) and virtue (*aretê*) of human-beings, which is characterized as the recognition of human ignorance. Additionally,

* 慶應義塾大学博士課程

the digression indicates the project of the whole argument in this dialogue, which aims to get readers to pay attention to human-being as a knowing- subject through the question about knowledge.

序

プラトンの対話篇『テアイテトス』では「知識（*ἐπιστήμη*）とは何であるか」という問いが主題として展開される．この問いに対して，対話相手テアイテトスによって三つの定義が提示されるが，そのすべてがソクラテスによって論駁され，知識の定義づけの試みは失敗に終わる．まずテアイテトスは，第一の定義として，「知識とは感覚（*αἴσθησις*）である」という見解を提示する．それに対しソクラテスは，第一定義が，何かが「それ自体である（*αὐτὸ καθ' αὑτὸ εἶναι*）」ことを拒否するとみなす．そしてそれと同様の見解をもつものとして，二つの立場を取り上げる．その一つは，「各人に現われることは各人にとってありもする」というプロタゴラスによる人間尺度説であり，またもうひとつは「万物は流れるもののように動く」という「パルメニデス以外のすべての知者」による流動説である．

そして本対話篇の中心部（172b–177c）には，「脱線部」と呼ばれる箇所がある．「脱線部」は第一定義に関する議論（第一部）の途中に，一見するとそれまでの議論とは無関係に登場する．さらに，「脱線部」以外の議論は，ソクラテスとテアイテトス（あるいはテオドロス）との短い問答によって進められていたのに対し，「脱線部」はほとんどソクラテスの一方的な語りになっている．そこでは，弁論家や一般大衆の生と，知を愛する者の生が対比的に語られる．そして前者に対して後者は「できるかぎり神に似ること（*ὁμοίωσις θεῷ κατὰ τὸ δυνατόν*）」と特徴づけられる．

この「できる限り神に似る」という考えは，のちのプラトン主義者たちによって生の目的として重視されてきた[1]．その一方で，この「脱線部」は，20 世紀の『テアイテトス』解釈のなかでは，ほとんど顧みられてこなかった．たとえば，ライルは「脱線部」を「哲学的にまったく無意味」

としているし[2]，マクダウェルは「脱線部」を前後の議論に対する「脚注」とみなしている[3]．

しかし近年，「脱線部」をより積極的意義をもつものとして捉えなおす解釈が試みられてきている[4]．とはいえ，その多くは，本対話篇に中期イデア論を読み込もうとする目的のもとで行われており，本対話篇における「脱線部」そのものの内在的意義についてはあまり考察されていない．

プラトンの対話篇において，「脱線部」とされる箇所は少なくない[5]．そしてそれは各対話篇全体にとってそれぞれ重要な意義をもつ．それゆえ本対話篇においても，「脱線部」を読み解き，その議論の位置づけを考えることは「知識とは何であるか」という本対話篇の主題がもつ射程や背景を理解するうえで不可欠である[6]．

したがって本稿では，第I節で「脱線部」が登場する文脈を確認する．そして第II節で「脱線部」の内容を検討する．そのうえで，第III節で，本対話篇全体の議論，とりわけ第一部の議論における位置づけを考察する．そして以上の考察を通じて，「脱線部」の問題射程が，本対話篇全体において一貫する主題「知識とは何であるか」といかに関わるかについて探求するための足掛かりとしたい．

I. 脱線部の文脈

「脱線部」では，正しさ（*δίκαιον*）や敬虔（*ὅσιον*）といった価値，ないし徳に関して語られる．この「脱線部」の議論を検討する前に，この「脱線部」が登場する議論の文脈を確認しておく．価値に関する議論は，プロタゴラスを通じて登場する．ソクラテスは，「各人の現われは各人にとってすべて真である」という人間尺度説への反論を行う中で，対話の場にいないプロタゴラスがどのような再反論を行うか想定し，次のように語る．

［166d4-7］

知恵や知恵ある人間が存在すると主張しないことは，多くの点で不十分である．しかし我々のうちで誰か，悪いものどもが現われまたあるような人には，その人を変容させ（*μεταβάλλειν*），〔その人に〕善いものどもが現われかつあるように為すような者（*ὃς ἂν … ποιήσῃ ἀγαθὰ φαίνεσθαί τε καὶ εἶναι*）を，私は「知者（*σοφός*）」と言うのである[7]．

［167b4-d4］

そして知者たちを，親愛なるソクラテスよ，カエルだと言うことは多くの点で不十分であり，身体においては〔知者は〕医者だと私は言い，植物においては農夫だと私は言う．というのも農夫たちは植物に，それら植物のうちどれかが病気にかかったとき，劣悪な感覚に代わり（*ἀντὶ πονηρῶν αἰσθήσεων*），有用かつ健康な感覚と真理（*χρηστὰς καὶ ὑγιεινὰς αἰσθήσεις τε καὶ ἀληθεῖς*）を生み出させるとわたしは主張するからである．また知恵ある善き弁論家は，国家にとって有用なことを，劣悪である事柄の代わりに正しくある（*εἶναι*）と思わせるようにするとわたしは主張するからである．というのも，たしかに各々の国家にとって正しく（*δίκαια*）また美しく（*καλά*）思われる事柄は，そのように取り決める限り，その国家にとってそうでありもするのだが，しかし，知者は劣悪であるものどもの代わりに（*ἀντὶ πονηρῶν ὄντων*），それぞれのその国家に，有用なことをありかつ思われるようにさせるのであるのだから．この言論によればソフィストも（…）知者であり，教育を受ける人々にとって多大な金銭の価値があるのだ．そしてこのように，ある人々は他の人々よりもより知恵ある者どもであり，また誰も虚偽を判断せず，きみも，きみが望もうと望むまいと，尺度であることを受け入れなければならないのだ．

このように，プロタゴラスは，現われに「善い（有用）／劣悪」という区別を設けることで，劣悪な現われから善い（有用な）現われへと目を向

けるようひとを変容させることができる者を，知者だと主張するとされる．そして，身体の健康と病気については医者，植物については農夫を知者として挙げることに加えて，国家の正しく美しい事柄[8]については弁論家を知者と見立てている．つまり価値の問題が登場せざるを得なかったのは，プロタゴラスが，各人が真理を判断することを認めて「各人の現われは各人にとってすべて真である」という人間尺度説を保持しつつ，自らの立場を特権的な知者として確保するためであった．

この再反論を受けて，ソクラテスは上記のようなプロタゴラスの主張を再整理しつつ，批判の糸口を探る．それによれば，①知者（*σοφός*）が存在しえない領域と，②知者が存在しうる領域が示されていた．それは以下のように図式的に整理できる．

（A）個人の経験や状態

①「温かい（*θερμά*）」「乾いた（*ξηρά*）」「甘い（*γλυκέα*）」などの感覚領域

②健康（*ὑγιεινά*）や病気（*νοσώδεα*）

（B）個人および国家の価値判断

①正しい（*δίκαια*）/不正（*ἄδικα*），美しい（*καλά*）/醜い（*αἰσχρά*），敬虔（*ὅσια*）/不敬虔（*ἀνόσια*）

②有益（*συμφέρον*）

ソクラテスの再整理によれば，この（B）-①について，プロタゴラスだけでなく一般的な人々が「何一つ自然本性的にあるのではなく（*οὐκ ἔστι φύσει*），それ自身の有（ある）をもたないもの（*οὐσίαν ἑαυτοῦ ἔχον*）[9]」と考えるという（172b4-5）．このように考える一般的な人々は，「プロタゴラスの言論を完全には語らないような人々（*ὅσοι … μὴ παντάπασι τὸν*

Πρωταγόρου λόγον λέγουσιν)」(172b7–8) と言われる．そしてこの点の確認の直後，「脱線部」に話が移る．それゆえ「脱線部」の議論は，プロタゴラスだけでなく，彼の人間尺度説を不完全にせよ保持している人々も議論対象に含みこんでいる．

以上のように，「脱線部」は，正しさなどといった価値ないし徳の「(自然本性的に) ある」ことをめぐる問題への言及をきっかけとして始まる．そしてこのとき，ソクラテスは，「より小さい言論からより大きな言論が我々を捕らえた」と言う (172b8-c1)．つまり「脱線部」は，徳に関する「より大きな言論」であり，人間尺度説の検討という「小さな言論」だけでは片づけられない，より包括的な問題を扱うのである．この「脱線部」では何が語られているのか，次節以降でみていく．

II.「脱線部」の検討

「脱線部」は内容の点で大きく二つに区別できる．そこで，前半と後半に分け，それぞれ検討していく．

II-1.「脱線部」前半

「脱線部」の前半は，「知を愛することのうちで多くの時間を過ごす人々が法廷へ行くと，笑われるべき弁論家 (*γελοῖοι ῥήτορες*) として現われる (*φαίνονται*)」というソクラテスの提言から始まり (172c4–6)，暇 (*σχολή*) のなかで知を愛する人々の生 (哲学的生) と，暇を持たず法廷で流れる水時計 (*ὕδωρ ῥέον*) に急かされて語ることを強制される人々の生 (世俗的生) とが対比されて語られる (172d4–173b6)．

この対比のなかで強調されるのは，哲学的生を過ごす人々と世俗的生を過ごす人々の関心の違いである．まず哲学的生を送る人々[10]は，法廷や国家の公共機関までの道などといった個別的な事柄について「知らないということさえ，知らない (*οὐδ' ὅτι οὐκ οἶδεν, οἶδεν*)」(173d9–e1) と言われ

る．その一方で彼らは「国家のうちにただ彼の身体だけが置かれていて住んでいるが，思考の方は，（…）あらゆるところを飛び回って（…）あるものどものうちの各々全体の（*τῶν ὄντων ἑκάστου ὅλου*），あらゆる点での自然本性全体（*πᾶσαν πάντῃ φύσιν*）を探究する」（173e2–174a1）とされる．ここでは，世俗的人々が親しむ「現われ」としての国家に対して，知を愛する人々が，この「現われ」を飛び越えた先の「ある」ことの自然本性を探求することが述べられている．

次に，全体のみに注目し個別的な事柄に全く関心をもたない哲学者の態度が，世俗的生を過ごす人々の視点からどう現われるかが語られる．天文学の為に空を見上げ，井戸の中に落ちてしまい笑われるタレス[11]の逸話が引き合いに出されつつ（174a4–8），次のように言われる．

［174c1–d1］

裁判所において，あるいはどこかその他の場所での足元にあることや目に映ることについて取り上げることを強制されるとき，トラキアの女性たちだけでなく，その他の大衆にも笑い者を提供するのです．井戸や全ての行き詰まり（*ἀπορία*）へと，無経験さによって陥ってしまうことで．（…）そこで〔知を愛する者は〕行き詰まりに陥って（*ἀπορῶν*），笑い者として現われるのです．

［175b4–6］

そのようなすべての場合において，そのような人〔知を愛する者〕は多くの人々によって嘲笑されます．一方では高慢だと，他方では足元の事柄を知らず，個別の事柄において行き詰まりに陥っている（*ἀπορῶν*）と，そう思われるがゆえに．

哲学者は，個別的な事柄について知らないがゆえに，世俗的な人々が知り行うことを行うことができず，世俗的な人々にとっては「笑い者として現

われる」とされる[12]．そしてこのように，世俗的な人々から哲学的生の「現われ」を記述するのは，哲学者の生そのものの描写よりも，人間尺度説に与する世俗的な人々が「現われ」に捉われている様子を浮き彫りにすることが念頭にあったからだと考えられる．

この一方で，世俗的な生を過ごす人々も，全体の事柄について語らざるをえなくなるとき，アポリアに陥ると語られる．

〔175b8-d2〕

ソクラテス：ところが，その知を愛する者自身が，友よ，ある人を上へと引っ張り，そしてそのある人が彼〔知を愛する者〕とともに，「私は君にどんな不正を行ったのか，あるいは君は私に〔どんな不正を行ったのか〕」ということから，正しさそのものや不正についての考察へと，（…）〔出て行こうと欲するとき〕，あるいは，「王は幸福か否か」，「また金貨を所有している者は〔幸福か〕」ということから，王すなわち人間の全体的な幸福や悲惨さ（*ἀνθρωπίνης ὅλως εὐδαιμονίας καὶ ἀθλιότητος*）に関する考察へと，つまり〔幸福と悲惨さの〕双方はいかなる種類のものであり，どのような道筋で双方を一方では獲得し，他方では避けることが，人間の自然本性（*ἀνθρώπου φύσει*）にとって相応しいのか，という〔考察へと出て行こうと欲するとき〕――それら全てのものどもに関して，かの，魂の点で小さく鋭敏で法廷的な者が言論を与えねばならないとき，今度は逆転して，彼らの方が逆のものを差し出し返すのです．

ここでは，個別的事柄に関する問いから，普遍的・根本的な問いへと移行するとき，笑い者となる立場が逆転する様子が描かれている．そこで問われているのは，「正しさや不正とは何であるのか」，「人間の全体的な幸福と悲惨さとは何であるのか」といったものである．このような普遍的・根本的な問いは，現われに埋没する生においては問うことはできない．そ

してこれらの問いは，人間の自然本性なあり方[13]に関する問いとしてまとめられている．世俗的な人々に対する，知を愛する人々の優越性は，人間の自然本性的なあり方が問題となる局面ではじめて明らかになるのである．

この人間のあり方についての問いは，人間の生の理解の相違を明らかにする．「脱線部」前半の終わりでは，世俗的な人々は，「言葉の調和を把握しながら正しく，幸福な神々と人間の真の[14]生（*θεῶν τε καὶ ἀνδρῶν εὐδαιμόνων ἀληθῆ βίον*）を歌い讃えることさえ知らない」（175e7–176a1）と言われる．つまりここでは哲学的生のみが，真の生にかかわることができるというのである．哲学的生と世俗的生との対比は，真の意味での人間の生へのまなざしの有無を浮かび上がらせている．

II-2.「脱線部」後半

前節で確認したように，「脱線部」前半では二つの生の対比が行われた．そしてこの対比によって，現われを超えた「ある」ことの探求が，人間の自然本性的な「ありかた」とその生についての理解につながることが明らかになった．

この対比による哲学的生の優位をうけて，テオドロスは，「あなたが語っていることを（…）説得するならば，人間たちのもとにある平和[15]がより多くなり，諸悪はより少なくなるのでしょう」（176a2–4）と言う．これに対してソクラテスは，この世の悪がなくなることは不可能であり，この世の諸悪から「できる限り早く逃避」しなければならないとソクラテスは言う（176a5–b1）．そしてそれは次のように言い換えられる．

［176a9–c5］

逃避（*φυγή*）は，できる限り神に似ることなのです．そして似ようとすることは，思慮を伴って（*μετὰ φρονήσεως*）正しく[16]，敬虔になることなのです．

（…）神はいかなる場合でもいかなる仕方でも不正ではなく，できる限りで最も正しい者であり，我々のうちで最も正しくなった者よりも神に似ているものは何一つありません．この点をめぐって，真の意味での人間の賢さ（*ἀληθῶς δεινότης ἀνδρός*）や，無価値さと男らしさの欠如（*ἀνανδρία*）とがあるのです．というのも，そのことの認識（*γνῶσις*）が真の知恵と徳（*σοφία καὶ ἀρετὴ ἀληθινή*）であり，他方で〔そのことの〕認識の欠如が明白な無知（*ἀμαθία*）であり悪徳（*κακία*）であるからです．

「逃避」は「できる限り神に似ること」[17] とされる．そしてここでは，真の人間の賢さ，真の知恵と徳は，いかなる場合でも最も正しい者，いわば「それ自体で正しくある者」ないし「正しさの尺度」としての神と対比されて語られる．

前節によれば，知を愛する人々は，人間の自然本性的なあり方を探求し，幸福な神々と人間の真の生を讃えることのできる者であった．それに加えて，彼らは「真の意味での人間の賢さ」にも接近している．それは，神が最も正しく，また人間のうちで最も正しい者は最も神に似ている，ということの認識である．

すでに確認したように，一般的な人々の考えでは，正しさは自然本性的にあるのではなく自身の「ある」ことをもたないのであった．つまり世俗的な人々は，神が最も正しい者であることに無知であり，この「真の意味での人間の賢さ」をもたない者なのである．そしてそれ以外の「賢さ」と呼ばれるものについて，こう語られる．

［176c5-d6］

他の「賢さ」や「知恵」と思われているものどもは，政治的な権力においては低俗になるもの（*φορτικαί*）で，諸技術においては小手先のもの（*βάναυσοι*）になるものです．（…）非難によって彼らは歓喜し，自分たちが役立たず

（*λῆροι*）ではなく，いかなる仕方でも大地のお荷物ではなく，国家のうちで守護されるべき類の人間である，こう聞いていると思います．（…）彼らは，自分をそう思ってさえいない（*οὐκ οἴονται*）がゆえに，それだけいっそう自分が思っていないような人々であるのです．

世俗的な人々は，真の知恵ではないものを知恵と思い込むことによって，自らを賢く知恵がある者と思っている．しかしそれはそう思っているだけであり，自らについての認識の誤りによって自身の不知を覆い隠している．対して，哲学者たちにとっての知恵とは，人間がそれ自体で十分に真の意味で正しくあると語ることはできず，つねにできる限り神に似るという仕方でのみ人間が正しくあると語りうる，ということの自覚である．哲学者たちの知恵と世俗的な人々の知恵との対比は，このような意味での「不知」の自覚の有無を明らかにしている．そしてそれは，次のように言い換えられる．

［176e3–177a3］
諸範型（*παραδειγμάτων*）のうち，一方は最も幸福で神的な範型として，他方は最も惨めで非神的な範型として，あるもの（*τῷ ὄντι*）のうちに据えられているのですが，そうであることを彼らが見ていないとき，愚かさと極めつけの知性の欠如によって，不正な行い故に，一方の範型に似てきていて，他方の範型に似なくなっていることに，彼らは気づかないのです．

世俗的生を過ごす人々は，生の「範型」[18]があることを知らないがゆえに，自分自身を「知恵のある者」だと考えてしまう．逆に言えば，人間的な真の知恵には，自らの生がこのような範型のもとにあることを自覚することが求められるのであり，この自覚は，正しさなどの徳に関する「不知の自覚」と不可分なのである．

III. 脱線部の位置づけ

ここまでで,「脱線部」の内容について考察してきた．これまでの考察によれば,「脱線部」前半では（1）哲学的生と世俗的生の対比が行われ,それが（2)「ある」ことを探求する生と,「現われ」に埋没する生との対比であることが確かめられた．さらにそれによって,（3）人間の自然本性的なあり方とその生に関する理解の相違を明らかにされた．そして「脱線部」後半では,（4）知を愛する人々が,真に人間的な知恵と徳を探求することが語られ,それは,（5）正しさや敬虔といった徳の領域における不知の自覚をもたらすことが明らかにされた.

本節では,このような整理を踏まえ,本対話篇における「脱線部」の位置づけについて,（1)「脱線部」そのものが説得として有効な議論なのか問うたうえで,（2）本対話篇における「脱線部」の役割について考察する.

III-1.「脱線部」は説得的な議論なのか？

まず,「脱線部」がそれ自体で何かを説得する効力をもちえるのか検討する.「脱線部」はソクラテスの長い語りによって展開される[19]．これは,対話相手との短い問答で議論を展開する他の議論と対照的である．それゆえ,「脱線部」においては,何らかの論証が行われているというよりも,ソクラテスの信念の表明が行われていると考えられる.

じっさい,「脱線部」は前後の議論に対して直接結びつけられていない[20]．というのも,「脱線部」が終わり,第一部の議論が再開されるさいに,一般的な人々の正しさに関する考えが再び語られるが,そこでは「脱線部」での議論は無視され,正しいものがそれ自体として「ある」ことは認められていないからである（177c6–d7）．また,プラトン自身も,「脱線部」が世俗的な人々に対して説得力を持たないことを認めている．というのも,ソクラテスによれば,「脱線部」の内容を世俗的な人々に伝えた

としても，彼らは誰か知性的でない人々（*ἀνόητοι*）から何かを聞いているように思うだろうからである（177a3–8）．またソクラテス自身が以上の議論を「脱線（*πάρεργα*）」と呼んでいる（177b7–c2）．それゆえ，「脱線部」がそれ自体でなんらかの説得的効力をもつとは考えにくい[21]．

「脱線部」が本対話篇の議論から浮いた印象を与えるのは，これらの論点が「知識とは何であるか」という主題と無関係にみえるからだと思われる．とはいえ，「脱線部」が本対話篇においてまったく無関係な議論を行っていると考える必要はない．脱線部の終盤においてソクラテスはこう語る．

［177b2–7］

彼らが非難していることに関して，個人同士で言論を与え受け入れなければならないとき，また彼らが雄々しく長い時間踏みとどまって女々しく逃げはしまいとするとき，そのとき奇妙にも，素晴らしき人よ，生を終えたときに彼らは，彼らが語っていることに関して満足せず，かの弁論術（*ῥητορική*）もなんらかの仕方で消尽していき，その結果，〔自分たちが〕子供たちと何ら変わらないように思われるのです．

「言論を与え受け取る（*λόγον … δοῦναί τε καὶ δέξασθαι*）」とは問答法（ディアレクティケー）を意味する．ソクラテスによれば，問答法の絶え間ない実践によって，「現われ」に捉われる世俗的な人々は，彼らやプロタゴラスが用いていた弁論術から遠ざかる．そしてそのとき，世俗的生を過ごす人々は，自らが優れた人間ではないことを自覚するという．

「脱線部」の終盤で問答法が登場することは，本対話篇全体の問答が，長時間にわたる哲学的営みの一部をなしていることを示唆している．つまり本対話篇の議論全体が人間の生や「ある」ことに対する態度の変更を最終的にもくろんでいることを示していると考えられる．そこで次に，第一

部全体における「脱線部」の位置づけを検討していく.

III-2. 本対話篇の主体の議論における「脱線部」の役割

第一部で検討される「知識とは感覚である」という第一定義は,「各人に現われるものは各人にとってそうありもする」という人間尺度説と結びつけられる. そして「現われる」ことが「感覚すること」であることが了解され, これによって,「現われ」と「ある」とが同一のものとみなされることになった (152a1–c1). この一連の議論によって,「ある」に関わることという知識の必要条件を, 感覚が満たすことが示された (152c5–6). しかしこれは同時に, 何かが「それ自体として (*ἐφ' ἑαυτοῦ/καθ' αὑτό*) ある」と語ることを拒否するものであった (152d2–4). 世俗的な人々が現われに捉われるということは, 世俗的な人々が「現われ」と「ある」とを同一視しているということを意味する.

この「ある」の問題に対して, 私は, 知識の条件として問題となる「ある」ことは, 知識の対象だけではなく, その主体がいかにあるのかということの把握も問題となると考える.「知識は感覚である」というテアイテトスの定義は,「何かを知っている者 (*ὁ ἐπιστάμενος*) は, 知っていることを感覚している (151e1–2)」という彼の了解から始まっている. これは, 第一部冒頭の「知識とは何か」という問いが, 知識の対象に関わるだけでなく,「知識を有する者とは誰か」という知の主体についての問いと不可分であることを示唆している.

知 (ないし感覚) の主体が何かを適切に把握することは, 人間の生や「ある」ことに対する態度の変更に必要な条件である. というのも,「脱線部」で述べられた, 哲学的生における知を探求する主体としての人間の自然本性に関する理解は, それを得ようとする主体の適切な把握を前提として, 獲得されうるものだからである. この点は, 本対話篇において知の主体がどのように問われ, 語られているのか検討することで, より明確にな

ると考えられる．

知の主体としての人間が，本対話篇においていかに理解されているのか．この点について，詳細な論述を本稿で行うことはできない．しかしながら，第一部における（a）第一定義および尺度説・流動説に基づく理解と，（b）この（a）についての批判を通じて見出されるソクラテスによる理解をそれぞれ簡単に検討し，本対話篇において知の主体としての人間に関する考察がいかに行われているのか探る手がかりとしたい．

（a）第一定義および尺度説・流動説に基づく理解

尺度説・流動説によって感覚の構造が説明される箇所（156a2–157c3; 159b2–160a4）においては，尺度説・流動説論者が人間のあり方についてどのように理解しているかを垣間見ることができる．そこで，この箇所について簡単に検討し，彼らの人間のあり方の理解の概要を説明したい．

彼らによれば，あらゆる感覚は，「作用を及ぼす力をもつもの（*τὸ δύναμιν ποιεῖν ἔχον*）」と「作用を被る力を持つもの（*τὸ δύναμιν πάσχειν ἔχον*）」という二つの力の種類によって説明される（156a5–7）．この二つの力の関わりから，感覚主体と感覚対象が生じるのである（a7–b1）．そしてここで感覚主体とされるのは，目や耳，舌といった感覚器官である（156e2–4）．そしてこれは，尺度説・流動説の立場において，知識の主体としての人間は，感覚器官の集合でしかなかったことを意味する．感覚の構造の説明の終わりでは，次のように語られる．

［157a7–c3］

こうしてそれらすべての事柄から，我々が初めに語ったように，何一つそれ自体であるのではなく（*οὐδὲν εἶναι ἓν αὐτὸ καθ᾽ αὑτό*），その都度何かにとってなる（*τινι ἀεὶ γίγνεσθαι*）のであり，「ある」はあらゆるところから排除するべきである（*τὸ δ᾽εἶναι πανταχόθεν ἐξαιρετέον*）．（…）そして同様に，部分（*μέρος*）

においても多くの集められたものども（*πολλῶν ἀθροισθέντων*）に関しても語らなければならない．その集合体（*ἀθροίσματι*）に対して人々は，人間（*ἄνθρωπον*）や石材，また各々の生き物と形（*εἶδος*）を定めたのである．

ここでは，尺度説・流動説のように，「それ自体である」ものを認めない場合に，あらゆる事物が，多くの感覚性質ないし感覚器官の集合体（*ἄθροισμα*）でしかないことが述べられている．つまり我々が人間や石材と呼んでいるものは，すべて感覚性質や感覚器官の集合体とされる．

このように感覚の主体を感覚器官とみなすことは，尺度説・流動説的な感覚の構造に基づいて，ソクラテスがワインを飲む事例を紹介するさいにも確認される．この事例においてソクラテスは，感覚主体を「舌」と表したり（159d1），「ソクラテス」と表したりしている（159e1–5; 160a9–b3）．これは，「ソクラテス」という感覚主体が，「舌」とも言い換え可能なものとして扱われていることを意味する．さらにこのとき主体は，つねに「作用を被るもの（*πάσχων*）」と言われている[22]（159c8–9; d2–3）．尺度説・流動説においては，感覚主体はつねに受動的であり，「作用を及ぼすもの（*ποιοῦν*）」としての感覚対象との関係をぬきにして，それ自体で「ある」と言うことができないものなのである．

そして「知識は感覚である」という第一定義と，尺度説・流動説との関係づけが行われたのち，ソクラテスは，次のように総括する．

［160d1–4］

ソクラテス：あるものども，あるいはなるものどもを巡る思考に関して無謬（*ἀψευδής*）であり躓くことのない私が，いかにして，私が感覚者（*αἰσθητής*）であるところの対象について，知識のある者（*ἐπιστήμων*）でありえないだろうか？

テアイテトス：そうでないということはいかなる仕方でもありえません．

ここで登場する感覚者（*αἰσθητής*）という語はプラトンの造語であり[23]，「知識のある者」として規定される．尺度説・流動説においては，知の主体のあり方は，「感覚者」として規定される．そして先で確認したように，「感覚者」としての知の主体は，感覚器官の集合体に過ぎないのである．

以上のように，第一定義および尺度説・流動説にとっての知をめぐる主体のあり方について論じてきた．このような主体のあり方に関する尺度説・流動説的な理解は，第一定義の最終論駁（184b–186e）において重点的に批判される．

(b) ソクラテスによる理解

最終論駁においてはまず，感覚に関する言語分析を通じて，人間が感覚器官「によって（*ᾧ*）」感覚するのではなく，感覚器官「を通じて（*δι᾽οὗ*）」感覚することが確認される（184b3–d6）．そしてこれは，感覚器官が真の主体ではなく，あくまで真の主体へと至る道具（*ὄργανον*）に過ぎないことを意味する[24]．そしてこのとき，ソクラテスは次のように言う．

> [184d1–6]
> ソクラテス：というのもきっと奇妙なのだ，友よ，もし我々の中に，ちょうど木馬のように，何か多くの諸感覚が横たわっていて，ある一つの形（*μίαν τινὰ ἰδέαν*）へと，それを魂（*ψυχήν*）と呼ぶべきであれなんと呼ぶべきであれ，それによって我々がそのような道具（*ὀργάνων*）のようなものを通じて，感覚内容の類を感覚するところのものへと，それらすべてが向かっていかないのであれば．
> テアイテトス：ええ，かの仕方であるよりもむしろその仕方であるように思われます．

ここでソクラテスは感覚において，感覚器官を道具とする一つの主体が

あるということを示そうとしている．注意すべきは，ここでソクラテスが，魂を主体の候補として挙げつつも，魂だと確定させてはいないということである．主体が魂であることが明らかになるのは，「ある」などといった，個別の感覚だけでは捉えきれないもの，すなわち「共通なもの（*τὰ κοινά*）」と呼ばれるものを，我々のうちの何が把握するのか，というソクラテスの問いにテアイテトスが答えるときである．

［185d6–e2］

テアイテトス：ゼウスに誓って，ソクラテスよ，私はまさに次のこと以外に言うことはできません．つまり，ちょうどかの感覚性質のようには，そのようなもの〔「共通なもの」〕にそのような固有の器官（*ὄργανον ἴδιον*）は始めから何一つないと思われます．しかしそれらすべてに関して，魂そのものを通じてそれ自体（*αὐτὴ δι᾽ αὑτῆς ἡ ψυχή*）が，「共通なものども（*τὰ κοινά*）」を吟味すると私には思われます．

「ある」などの共通なものを把握するのは，魂それ自体である．このテアイテトスの答えを，ソクラテスは激賞し，賛同する（185e3–9）．これは，第一定義を提示したテアイテトスが，ソクラテスとの問答を通じて，人間のうちに知の主体としての魂を見出した決定的瞬間である．以降では，このテアイテトスの答えを足場として，感覚が「ある」の把握という，知識の必要条件を満たせないことが，明らかになっていくのである．

先に触れたように，知の主体を適切に把握することは，人間的な知と徳の獲得にとって重要な意義をもつ．そして（a）（b）の分析を通じて，知（ないし感覚）の主体が感覚器官ではなく，魂であると見定めることこそ，知の主体の適切な把握であることが示された．知の主体として導出された魂は，「脱線部」において知を愛する者が遂行するとされた知の探求を可能にする．というのも，知を愛する者は，感覚や現われを超えた「それ自

体としてある」という地平において知を探求するが，この「それ自体としてある」ことを把握する主体は，魂そのものであると考えられるからである．そして「脱線部」で語られた，真の意味での正義が「それ自体としてある」以上，真に人間的な知と徳は，魂が探求すべきものであることになる[25]．

とはいえ，この魂の導出によって知識の問題が解決するわけではない．テアイテトスはあと二つ定義を提示するが，それらがすべてソクラテスによって論駁される．しかし本稿における第一部の考察を通じて言えるのは，本対話篇が，「知識とは何か」という問いを通じて，知の主体としての人間のあり方[26]を問題としている，ということである．そしてこれは，第二，第三定義の議論でも一貫していると考えられる．

本対話篇で全ての定義の試みはすべて失敗に終わる．しかしそれは，テアイテトスが人間的な知恵と徳に向けてまったく前進しなかったということを意味しない．ソクラテスは，本対話篇の議論のいわば成果として次のように言う．

> [210b11-c4]
> ソクラテス：さて，もしこれらの後で，他の〔知〕を孕む者になろうと試みるのであれば，テアイテトスよ，もしそうなるとしても，君はいまの吟味ゆえにより善いもの（*βελτιόνων*）で満たされるだろうし，もし空っぽであるとしても，君は居合わせる人々にとってより重荷ではなくなるだろうし，より穏やかな者で，健全な思慮を以て（*σωφρόνως*），知らないことを知っていると思わない者であるだろう．

これは，本対話篇の議論を通じて，テアイテトスが不知の自覚へ前進したことを示している．本対話篇において問われる「知識」は，以上のような知の主体としての人間の理解と不知の自覚を含みこんでいる．本対話篇

は，対話相手テアイテトスが，感覚という人間のあり方の最も低次なレベルでの理解から出発して，徳の配慮と不知の自覚を伴う人間の真の生へと向かわせるという目論見を持つ.「脱線部」は，本対話篇におけるこの哲学的実践の目論見を明確に示す役割を果たしている.

結論

本稿では,「脱線部」の内容の検討と，本対話篇における位置づけについて考察した.「脱線部」においては，世俗的生と哲学的生との対比を通じて，人間の自然本性的なあり方の理解が真の意味での人間的な知の把握に必要であることが論じられた．そして，最も正しい者としての神を生の範型とし，そこにできる限り似ようとすることが不知の自覚であり，その自覚のもとで生きることこそが，人間的な真の生であることを本稿で明らかにした.

そもそも「脱線部」は，直前の議論で言及された，正しさなどといった徳の「ある」ということに関する問題を受けて始まったものであった．したがって，人間の真の生と不知の自覚は，正しさや敬虔といった徳が問題となる局面で，浮き出てくるのである.

さらに本稿では，この「脱線部」の内容が，本対話篇における「知識」に関する議論の射程を明確にしていることを指摘した．本対話篇は，真の意味での人間的な知恵と徳への配慮を人々に促すことを目的としている．そしてそれは，知の主体としての人間がいかにあるのか，ということの探求をも要求するのである.

しかし本稿では,「脱線部」が第二定義や第三定義の議論とどう関係するかという点については，論ずることができなかった．この点を課題とし，本稿を締めくくりたい.

【参考文献】

〈テクスト・翻訳〉

Burnet, J., edd., *Platonis opera* Tomus II, Oxford classical text, 1901.

E.A.Duke, W.F.Hicken, W.S.M.Nicholl, D.B.Robinson, J.C.G.Strachan（ed.), *Platonis Opera* Tomus I, Oxford Classical Text, 1995（底本).

田中美知太郎訳『テアイテトス』，岩波書店，2014.

渡辺邦夫訳『テアイテトス』，筑摩書房，2004.

〈注釈・論文〉

Barker, A. "The Digression in the 'Theaetetus'", *Journal of the History of Philosophy*, 1976, 457–462.

Bradshaw, D. "The Argument of the Digression in the *Theaethus*", *Ancient Philosophy* 18(1), 1998, 61–68.

Brisson, L. "The Relations between the Interpretation of a Dialogue and Its Formal Structure. The Example of the *Theaetetus*", in *Formal Structures in Plato's Dialogues*, F. Lisi（ed.), Academia Verlag, 2011, 87–98.

Buddensiek, F. "Thales Down the well: Perspective at work in the digression in Plato's *Theaetetus*" Rhizomata 2(1), 2014, 1–32.

Burnyeat, M. F. "Plato on Grammar of Peceiving,", 1976, *Classical Quarterly* NS 26, 29–51, Also in *Exploration in Ancient And Modern Philosophy*, 2012, 70–98.

—— *The Theaetetus of Plato*, Hackett, 1990.

Campbell, L. *The Theatetus of Plato*, Oxford, 1883.

Mahoney, T.. "Is Assimilation to God in the *Theaetteus* Purely Otherworldly?", *Ancient Philosophy*, 2004, 321–337.

McDowell, J. *Plato: Theaetetus*, Oxford, 1973.

McPherran, M. L. "Justice and Piety in the Digression of the *Theaetetus*", *Ancient Philosophy*, 2010, 72–94.

Rue, R. "The Argument of the Digression in the *Theaetetus*" *Ancient philosophy* 18(1), 1993, 61–68.

Ryle, G. *Plato's Progress*. Cambridge, 1966.

Sedley, D. "The Ideal of Godlikeness", in *Plato 2 Ethics, Politics, Religion, and the Soul*, G. Fine（ed.), Oxford, 1999, 309–328.

—— *The Midwife of Platonism*. Oxford, 2004.

—— "*Plato's Theaetetus as an Ethical Dialogue*", in *Ancient Model of Mind: Studies in Human and Divine Rationality*, A. Nightingale and D. Sedley (ed.), Cambridge, 2010, 64–74.
納富信留『ソフィストと哲学者の間』，名古屋大学出版会，2002.
渡辺邦夫「『テアイテトス』の『脱線議論』（172C–177C）の意義と内容について」，茨城大学，『人文学部紀要(13)』，2012, 278–302.

注

[1] 例えばプロティノスの『エネアデス』第 19 論攷（I-2）はこの箇所の検討が中心となっている．
[2] ［Ryle 1966, p. 278］.
[3] ［McDowell 1973, 174］.
[4] E.g.［Barker 1976］［Brisson 2011］［McPherran 2010］［Sedly 2004］［渡辺 2012］
[5] 例えば『国家』5–7 巻はソクラテスによって脱線とみなされている（543c）し，『ソフィスト』の中央部（236d–264b）も脱線として扱われる．Cf.［納富 2002, pp. 28–42］.
[6] Burnyeat や Sedley は「脱線部」が本対話篇の中心にあることを重要視して，本対話篇全体の企図にとって核となる部分だとみなしている（Cf.［Burnyeat 1990, p. 35; Sedley 2004, p. 63, n13］）.
[7] 訳はすべて筆者による．〔〕内は筆者による補いを示す．さらに，発表中の傍点はすべて筆者による．また，底本として 1995 年の新版 OCT を用いている．
[8] 『プロタゴラス』318e–319a では，ソフィストの技術は「国家社会の為の技術」であるといわれる．
[9] 「ある（*οὐσία*）」と「自然本性（*φύσις*）」は，本対話篇内では同義的に扱われていると考える．
[10] そこで哲学的生を送る人々は「我々の合唱団（*ἡμετέρος χορός*）」の「主唱者たち（*κορυφαῖοι*）」として語られる．この点から，ここで語られている哲学者が一般的哲学者ではなく『国家』において描かれた理想的な哲学者像とも考えられる（cf.［Rue 1993, p. 78］）．ただし，「ある人が，知を愛することのうちで劣悪な仕方で（*φαύλως*）過ごす人々について何と語りうるか」という想定のもと語られている点には注意すべきであろう．
[11] タレスが本当に落ちたと考える必要はなく，井戸に入ることが天文学を行う上で必要なことであったという解釈がある．私もこれに同意する．Cf.［Buddensiek 2014］.
[12] このような哲学者に関する記述が，プラトンの擁護しようとしているものであるかどうかは，微妙な問題である．複数の解釈者たちが指摘するように，「脱線部」で描かれる哲学者像は，ソクラテスには当てはまらない．というのも本対話篇の議論は，ソクラテスがテアイテトスという個人の魂を，徳と知恵の点で吟味するという目論見から始まったもの（145b1–4）であるし，本対話篇の最後

には，ソクラテスはメレトスによる告訴状のためにバシレウスの役所に赴くからである（210d2–4）．解釈者の中には，「『地下の大地』や地上を幾何学的に計測し，『天空を超えて』天文学し（e5–6）」，というピンダロスの引用を用いた哲学者についての記述が，アリストパネスのソクラテスに関する記述や『弁明』篇におけるソクラテスへの告訴内容と類似しているということから，「脱線部」における哲学者はその理想像というよりも風刺だと主張する者もいる（cf.［Rue 1993］）．他方で，『国家』517d8 の記述との類似から，理想的な哲学者が被る誤解を記述していると考える者もいる（e.g.［Sedley, 2004, p. 65］）．しかしいずれにせよ，「脱線部」においては，哲学者の実像ではなく，世俗的人々からみた「現われ」を記述している点に違いはない．

13 「自然本性 *φύσις*」と「あり方 *οὐσία*」は，脱線部直前の正しさに関する言明（172b4）で同義的に用いられており，脱線部においても同様である．

14 *ἀληθῆ* という語は，すべての写本（さらにはエウセビオスとイアンブリコス）が保持しているにもかかわらず，OCT はアテナイオスの読みを採用し削除している（Burnet 校訂版は削除記号を付している）が，これには従わない．

15 172d5 では，哲学者は平和（*εἰρήνη*）の内で過ごすとされる．

16 この正しさと敬虔の関係については，Sedley（2004, pp. 74–88），McPherran（2010, pp. 82–93）を参照．

17 類似する表現については，『国家』10 巻 613b1,『法律』4 巻 716c1–d4 を参照のこと．

18 この語はイデアにも用いられることから，「脱線部」にイデア論を読みこもうとする解釈者たちがいる（e.g.［Brisson 2011］）．しかし，ここでは神的な範型と非神的な範型が対として用いられている以上，神的なもののみに用いられる範型イデアとは異なるものと考えるべきであろう．

19 このことから Burnyeat は「脱線部」をレトリックとみなしている（cf.［Burnyeat 1990, pp. 33–34］）．

20 渡辺は「脱線部」が前後の議論に変化を与えていると解釈している．その変化の一つとして，善さと有益が敬虔・正しさと同グループに配置されたことを挙げている［渡辺 2012, p. 285］．しかし，渡辺も認めているところではあるが，「脱線部」から議論が再開してすぐ正しさと善ないし有益は対比的に語られており，正しさがそれ自体として「ある」ことは認められていない．「未来」に関する判断の問題も，「脱線部」がなければ登場しなかったと考える必要もない．

21 とはいえ，テオドロスはこの「脱線部」の内容について説得力があると考えており（176a2–4），同じような信念をもつ人々にとって，ある種の説得力をもつことまで否定するつもりはない．

22 この点は，プロタゴラスの自己弁護の箇所において再び言及され，「ひとは，ないものども（*τὰ μὴ ὄντα*）や，被っている以外の他のもの（*ἄλλα παρ᾽ ἃ ἂν πάσχῃ*）について判断することはできない」とされる（167a6–8）．

23 Cf.［Campbell 1883, p. 73］．

24 この一連の議論の解釈については，［Burnyeat 1976］の研究に負っている．

25 この点は，『弁明』篇 29d7–30b3 において語られる，魂の配慮と徳の吟味探求の

不可分性に呼応していると思われる．つまり魂の配慮が徳の吟味探求を促すように，徳を探求するためには，魂への配慮が求められるのである．

26 すでに確認したように，「脱線部」は，プロタゴラスだけではなく，プロタゴラスの説に部分的に加担している人々が取り上げられていた．それは，彼らが何らかの形でプロタゴラスの言論「万物の尺度は人間である」という考えを保持していることを意味している．そして「脱線部」は，この「人間」（あるいはその生）そのものの理解が問題であること，その理解とは異なる人間のあり方を提示している．